

第二章

沿革概観と展望

第一節 沿革概観

原始・古代

本町の太古のことについては、文献に見るべきものが少なく明らかでない。

奈良朝のころ（和銅元年＝七〇八）に安良姫を安良岳に祀った。これが郷社安良神社の起りである。木浦権現の伝説や、阿弥陀寺、安良山来福寺真乗院、万亀山仙寿寺などの史跡から考え合わせると、上ノ正牟田方面、中ノ川北方面には相当な文化が発達していたことが想像される。

中世

承久（一二一九～一二三二）のころ（鎌倉初期）、横川藤内兵衛尉時信が横川院の領主であった。のち北原氏に代わったが、永禄五年（一五六二）五月北原氏に内紛が起り、城主北原伊勢介は島津一五代貴久に攻められ、同年六月三日ついに落城した。のち菱刈氏の領となったが、永禄一〇年（一五六七）島津氏に背いたため征服され、のち島津氏の直轄となつた。

た。

近世

寛永一七年（一六四〇）宮之城城主島津図書久通によって、永野金山が発見さ

れ、やがて山ヶ野も鉱山都市として発展した。殊に万治二年（一六五九）のころは産金量が最も多く、佐渡金山をしのぐほどで、その後全国屈指の金山として、幕末まで薩摩藩の財政を支えていた。当時は山ヶ野地区だけで、一万人以上住んでいたという。昭和三〇年代までは金の採掘が行われ、町も活気を呈していた。

江戸時代には横川郷として、地頭飯屋をおき、郷士年寄（暖）組頭、横目の三役の下に郡見廻、櫛楮見廻、行司、竹木見廻などの係があつて、上ノ、中ノ、下ノ、の三村には庄屋をおいて、飯屋の命令伝達の任に当たらせ、郷政を治めて、明治維新に至った。

近代・現代

明治に入り、廃藩置県によって一時都城県に属したが、明治五年（一八七二）五月、行政区画の改正によって、鹿児島県に属し、戸長役場を設けて郷行政を行ってきた。明治一七年（一八八四）官制戸長制度が布かれ、桑原郡横川郷（中ノ村、上

ノ村、下ノ村）となったが、明治二二年（一八八九）市制町村制の実施に伴い、三村を合併して横川郷が横川村となった。その後昭和一五年（一九四〇）四月一日から町制を施行して横川町と改称し、現在に至っている。

思うに、横川郷は本県東目街道の一要駅であり、伊佐郡大口方面及び西諸県郡と鹿児島方面との交通輸送の要衝であった。昔は荷馬、荷馬車、客馬車等の往来が頻繁で、昼食時には、町の通りがこれらの馬車や馬でふさがり、子供らの通行は危険だったのである。しかも、これらの馬の排泄物（はいせつぶつ）がまわりの田んぼに流れ込み、田は無肥料でもできすぎて困ったという話も残っているほどである。

横川郷は宿場町、中継駅として、金山の隆盛とともにすこぶる繁栄し、宿屋、飲食店、呉服屋、雜貨屋、薬店、書店、酒店などが軒を並べ、新町方面にかけて非常に賑わっていた。しかし、肥薩線の開通、金山の衰微につれて、商況も漸次おとろえ、居住する人々も変わっていった。この繁華と衰微はただ町方面だけのことでなく、中ノ方面最初の城下集落であった仙寿寺馬場をはじ

め、明治末期まで村の権勢を保っていた麓集落（宮下、川北、向江、二石田）、あるいは遠く金山最盛を誇った山ヶ野、白仁田などでも見られるように、昔いかめしかった門構えや家、屋敷などが、その後の子孫が他郷に出て零落の一途をたどったか、今はただ門柱や石垣などにその面影をしのぶ家が多い。

第二節 展 望

しかし現在、中ノ二石田方面や上ノ南ヶ迫方面に企業が進出し、長らく続いた人口流出も鈍化の傾向にあって、町もようやく活気をとりもどしつつある。

最後に『横川町郷土誌』の改訂にあたり、本誌の特異点を述べ、将来への希望を記してみることにする。

一、郷土民に古昔から神仏崇拝の念が深かったことはよくうかがわれるところである。中でも安良姫を祀る郷社は信仰の中心であり、近郷まれに見る御神体、仏像、古宝物を蔵しているが、現在は祭典、参拝者ともに余りにも寂しい。全町民がもっと関心を深め、祭典も盛大に行うようしてもらいたい。

二、横川藤内兵衛尉時信以来、郷の領主は次々代わっていったが、覇業興亡の武家政治の華やかさは、北原伊勢介の横川落城までが最高潮であった。横川城跡地は昭和六一年（一九八六）一〇月の発掘調査後

きちんと整備し、北原氏夫妻の墓碑ももとの位置に建てがあるので、町民がいつも香華を手向けるようにしたい。

三、全国屈指といわれた山ヶ野金山の殷賑時代と、鉄道開通前の北隅交通要路としての横川町の繁栄時代は、特筆すべき時代であり、また、これは町民の精神文化のうえに残されているし、人物史とも関係が深いことを認識してほしい。

四、平和は万人の希求するところであるが、過去、内外における戦争は絶えなかった。いたましいこれらの犠牲者となった招魂社に祀る幾多英霊先輩に対しては、永久に弔意を献げ丁重に祀るべきである。

五、黒葛原新田、植村新田の個人的偉業とともに、政治、教育、産業などに尽くされた先輩故人の偉業、祖先の協力奉仕の賜物である造林、建築、道路、護岸、集落新田などの遺業、遺跡に対しては深い感謝を献げ、さらにこれを町民幸福のために継承すべきである。

六、自然と人為の地域的關係から、有為の軍人、教育

家、警察官その他が多数輩出したことは、今後の子弟教育の好資料ともなろう。

七、われわれ編集者は、本誌によって多少なりとも読者に郷土愛の念が湧いてくれることを期待する。

横川の土地は、平地が少なく、丘陵、溪谷、急坂の土地が続ぎ、農業、交通その他に不便が多い。しかし、われわれの祖先は、この悪条件を克服して今日の横川を開発してきたのである。

われわれはこの遺業を継ぎ、悪条件をお互いの創意協力によって、逆に利用高度化して、町の繁栄、町民の幸福を企図し実現しなければならない。